



三重陸協たより

三重陸協広報部発行

第4号

平成22年10月16日

千葉国体 高校生が大活躍！

10月1日(金)～5日(火)の5日間、千葉県総合スポーツセンター陸上競技場で開催された第65回国民体育大会陸上競技大会で、三重県チームは10種目で入賞し、天皇杯(男女総合)18位、皇后杯(女子総合)19位という成績を残しました。特に高校生は、少年Bの諏訪達郎(四日市工高)選手と西山雄介(上野工高)選手の2位をはじめ7種目で入賞する大活躍をしてくれました。高校1・2年生が上位入賞を果たしており、来シーズンに向けて楽しみな結果となりました。

第65回 国民体育大会陸上競技大会 入賞者

10月1日(金)～5日(火)

千葉県総合スポーツセンター陸上競技場

2位	男子 少年B	100m	諏訪 達郎(四日市工高・1)	10秒68(+1.7)	
	男子 少年B	3000m	西山 雄介(上野工高・1)	8分29秒31	
3位	女子 少年A	100m	伊藤 瑞希(四日市商・2)	12秒06(+1.5)	
	女子 少年A	100mH	辻 彩美(桑名・2)	14秒14(+0.6)	
4位	男子 少年A	5000m	中村 匠吾(上野工・3)	13分59秒88	
5位	女子 成年	砲丸投	茂山 千尋(国土館大)	14m52	
	女子 少年A	ハンマー投	大木 琴未(鳥羽高・3)	47m20	
6位	男子 成年	110mH	隈元 康太(モンテローザ)	14秒00(-0.9)	
7位	男子 少年A	ハンマー投	森本 涼太(宇治山田商・3)	59m69	
	女子 成年	100m	世古 和(筑波大)	11秒99(+0.5)	
	天皇杯(男女総合)		18位	皇后杯(女子総合)	19位

第58回 全日本実業団対抗陸上競技選手権大会 入賞者

9月24日(金)～26日(日)

東北電力ビッグスワンスタジアム

2位	男子	3000mSC	梅枝 裕吉(NTN)	8分34秒96
4位	男子	3000mSC	菊池 敦郎(NTN)	8分43秒92
	男子	円盤投	藤原 潤(八千代工業)	50m18
5位	男子	円盤投	蓬田 和正(日本陸送)	49m70
	男子	ハンマー投	久保 幸弘(鳥羽高教)	59m40
6位	男子	1500m	坂 直哉(NTN)	3分49秒73
7位	女子	三段跳	伊藤佳奈恵(三重聾教)	11m98(-0.1)
8位	男子	400mH	武田 健太(日本陸送)	53秒96
	男子	走幅跳	出口 義人(あけぼの学園)	7m22(-0.4)

全国高専大会 40年ぶり総合優勝！

インターハイ・インカレでも活躍

～ 鈴鹿工業高等専門学校～

8月11日(水)～12日(木)、富山県総合運動公園陸上競技場で開催された第45回全国高専大会で総合優勝を果たした鈴鹿工業高等専門学校。近年は走高跳の衛藤昂選手を中心に、インターハイ、国体、日本インカレなどで活躍をしています。インターハイに参加できるようになって15年、新人戦や春季大会など高体連の試合に参加できるようになったのは3年前、スポーツ推薦もなく、実習やレポート提出で毎日練習に出てこれないことも多い中で、着実に実績を残してきた秘訣を、監督の舩越一彦先生にうかがいました。

高専のよいところは5年間の一貫教育のため、高校3年での引退がなく、進路の心配をせず継続して競技に打ち込め、高校年代に活躍した4・5年生がよい見本となって後輩達を引っ張ってくれているところです。

練習時間の確保が難しいため、短い練習時間で質を上げるために独自のウォーミングアップ方法を毎年工夫しています。体幹を支持する動きを入れ、股関節のドリルはすべてハードルでやることにより可動域がまちまちだった選手もほぼバランスよく可動域を広げることができるようになりました。

衛藤はじめ数名をアメリカの練習に参加させてもらった経験がありますが、コーチ曰く、“エトー イズ サバイヴ”つまり衛藤ならアメリカでも生き残れるよと言われました。この表現からもわかるようにアメリカの厳しさは日本の比ではありません。今年は衛藤が世界ジュニア日本代表に選ばれましたが、アメリカ人がほとんど活躍していませんでした。ここからの数年間のうちにオリンピックで金メダルを独占するような選手達に育てていけるだけのノウハウを持っているということです。大人になってからピーキングがくるようにジュニア世代の選手は余裕を持って育てているということも学ばせてもらいました。

部員は約50名いますが、すべての部員が活躍できる機会に恵まれているわけではありません。ただ、5年間続けることで社会に出たときに「人に好かれる人間、何でもできる人間になれ」を座右の銘にして取り組んでいます。これは私が高校時代の恩師からいただいた言葉で、技術者を目指している高専生にとって一番身につけてほしいことです。

まだまだ発展途上のチームではありますが、多くの方に支えられて全国大会入賞選手を出すことができるようになってきました。高体連委員や三重陸協強化部の皆様をはじめご指導いただいた各先生方にお礼を述べさせていただくとともにこれからもご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

40年ぶりの優勝となった全国高専大会。当時の監督は衛藤選手の祖父勝田叡氏。衛藤昂選手の走高跳優勝をはじめ、100m(清水開史・3)、200m・400m(湯田功稀・4)、走幅跳(大津涉・4)、4×100mR(奥野・岡山・清水・湯田)の6種目で優勝しました。